

オーテス・ケーリー

杉井六郎

(大学名誉教授)

A History of Christianity in Japan

はじめに

オーテス・ケーリー(一八五一―一九三二)が同志社における「人物誌」(七八)に取扱われることになった。それは編集子の「愁思」によるものであるうか。余談はさておいて、苦慮、黙考、しばし、ここに展開するような形になった。

表題の通り、オーテス・ケーリーを追うことに違いはないが、副題にかかげたように、彼の「遺業」を次に述べるような手法で運ぶことにした。

オーテス・ケーリーの「遺産」で、衆

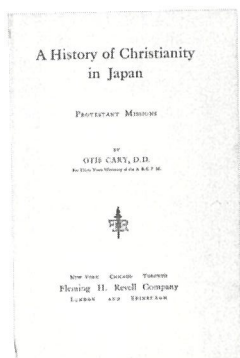
目的一致して推す「大業」は『A History of Christianity in Japan』(以下便宜のために、『日本キリスト教史』と呼称する)という浩瀚な著作であろう。それは一九〇九(明治四二)年 Fleming H. Revell Company, New York から出版された。

筆者がはやく教えられ、その深い意図にうたれたのは、その書物の表題が定冠詞をもつてしないで、Aをもつてはじめてのことである。それは、何年も経た今日においても変わらないオーテス・ケーリーに対する私の姿勢である。

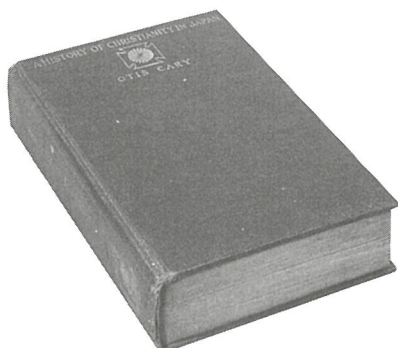
この著作はアメリカン・ボード派遣の

宣教師としての伝道・宣教に根ざしているわけであるから、オーテス・ケーリーを追跡する手法の根底には、その信仰とそれに基づく日日の宣教活動の實際を綿密に掘りおこす作業が必要である。しかし、ここでは『日本キリスト教史』を、世に再びする――復刊する――大仕事にかかわる人、同名のケーリー(孫のケーリー)の姿勢を通して、祖父とそれにつながる思いを明らかにしようという立場にたつて、これを考察しようとするものである。

なお、もう一つ限定を設けなければな



旧版フロントページ



旧版・表装丁

らない。それは、元来、本書は Roman Catholic, Greek Orthodox と Protestant Missions の別冊二本立である。一九七六（昭和五一）年の復刊本はこれを合巻することがなされており、各ページ数は旧刊のままに残して、一冊仕立に改めている。旧版との対比をいちいちおこなったわけではないが、旧版に見られたわずかの誤植も、そのまま踏襲されており、したがって、そのままの復刊であることが知られる。このような体裁を新しく改めることがおこなわれているにもかかわらず、ここでは、その主とした言及を Protestant Mission に限定したことである。Roman Catholic, Greek Orthodox の歴史におよぶことは、非力の身の到底なすべきではないと自ら戒めたことによる。

なお、この復刊は Charles E. Tuttle Company (Rutland, Vermont) 出版であり、また、日本の本書の取扱は、東京都文京区水道一丁目二一六のチャールス・E・タトル会社でおこなっている。

復刊本に見られる特徴

本書の編成の大きな特徴は、旧版冒頭に見られる献題 (Dedication) の次に、ライシャワー (Edwin O. Reischauer) の一九七五年五月十四日付の序言 (Foreword)、孫 オーテス・ケーリーの同年七月十八日付の再版緒言 (Preface to the second edition) が加えられていることである。これらの文章の一部分は、復刊本の「帯」にも、それぞれ引用されており、六十年余を経過して、本書が新しい装いで門出することをかざっている。

この二つの追加は出版にあたって単に追補されたものではなく、本書の占める学問上の位置を確認し、かつは従来知られていない、ケーリー家三代にわたる「家の宗旨」というか、「家の信念」ともいふべき面に見え、その言及には、改めて目を見はるものがある。

(一) ライシャワーの序言

彼の序言は、「日本におけるキリスト教史について、これほど明確にした書物はこれまでになかった」という記述ではじめられる。そして、日本におけるキリス

ト教史の四時代区分 (一)十七世紀、(二)十九世紀後半、(三)一八九〇年から第二次大戦、(四戦後)のなかで、ケリーーの活躍は第二期から第三期に続くときであるとし、その伝道・宣教・そして大著執筆にわたる時代の彼の位置、姿勢を次のように述べている。

“近年の研究動向は、その研究課題について、新しい史料を用い、さまざまな異なった視点から言及することが進められているが、そうした中であって、彼のこの二冊の本が発刊後、六〇年以上をへても、なお根強い支持をえている背景には、ケリーーの徹底した慎重な研究姿勢とバランス感覚に負っている。事実、オーテス自身が十九世紀後半にわたって日本におけるキリスト教伝道の主要な参与者 (a major participant) であったことから、この伝道史についての彼の判断や評価は、単なる第二次的史料ではなく、ある意味で日本におけるクリスチャン・ミッションの歴史における重要な時期のブライマリー・ソース (根源的史料) とも

いえる” (viii 35~ix 9)
それは、歴史上の評価としては、きわめて高い評価を与えていることになる。ライシャワーの結びは、次のようである。

“焦点は時がたつにつれて変わり、拡散していくが、アメリカ合衆国と日本の両国にわたる文化交流という家の伝統 (the family tradition) は続きたえることがない” (ix 18~20)
彼のこの言葉の末尾は、一九七五年五月十四日、ケンブリッジ・マサチューセッツとある。

いま、ザビエルから当代に渉る壮大な視野の中で、日本のキリスト教史を考え、オーテス・ケリーーの書物の位置を定めているライシャワーの史眼もさることながら、改めてケリーーの大業の位置を教えられることが多い。

(二) オーテス・ケリーー (孫) の再版への緒言

ケリーーの緒言の書き出しは、次のようにはじめられる。それはまさに祖父ケリーー、そして父フランク・ケリーー、そしてその一族のことを念頭においての

ことであろう。きわめて丁寧懇懇である。
“著作権が消滅したのち、長くたつてから本書が復刻されるというのは奇妙に思われるかもしれない。しかしながら、個々人や数多くの図書館から、復刊の要望や懇願が寄せられるならば、それはこの Original な仕事というものが、アジアのより古い宗教構造の中に、キリスト教信仰を注入していく精神史をあますことなく語るものであることに外ならない” (xi 1~7)

と述べて、本書のもとになる一九〇八年、アンドーヴァー神学校における Hyde Lecture に言い及んでいる。

祖父オーテス・ケリーーの記録によりながら、祖父のこと、ついで父、フランク・ケリーーのことに及ぶ。そして、再び祖父オーテス・ケリーーにかえて、カリフォルニア、ユタにおけるケリーー老夫妻の日本人移民社会に教会を設立するうごきを援助し、とくにオグデン (ユタ州) に一つの教会 (その設立当時遭遇する日本人牧師は同志社出身の辻密太郎である) をたてるといふ活動を展開し、しかもなお、歴史的、神学的研究を精力



オーテス・ケーリー夫妻
於同志社教師館 明治末年

的に続けた生涯をしるす。その末尾は、次のような言葉で、祖父の仕事に対する思いを述べる。

「オーテス・ケーリーの名をうけつぐものとして、オリジナルな仕事を『完成』(completion)させるという責務を果すことは到底、私の能力やあるいは意志の及ぶところではない。scholarship がかり立てないばかりか、宗教的場面での気質そのものが、異なっており、多宗派的になって、さらに発展してきているので、若輩の何もわからない、後につづく者のいかなる試みも道はとざされている」(XIII-17)

と。「序言」にはめずらしい表現である。逆に言えば、いかに祖父、そして父が大きい存在であったかも述懐している。

しかも、この流れを改めて、彼の Prefiguring は突如として、次のような結びの文に入る。

「まず最初に二〇〇〇部が刷られた。数年後、一〇〇〇部以上が売れ残っているのを、どう処理したいのか尋ねられた。宣教師のサラリーからすると、二三セットしか買い入れることが出来

ず、したがって、残りはすべて廃棄処分になった。

その後、第二巻(Protestant Missions)を逸するようになった図書館からの問い合わせが相次いだ。そのことは俺(我々子孫)にとって the descendants にとって、なんと説得力のあることであつたらうか!

この復刊は図書館の欠本をうめたばかりでなく、騒々しい時期にあつて、意義とか価値を求め、さまよう世界中の新しい学問のために、確固とした基盤を与えることになるのであろうことを希望してやまない。

確かに、この本は著者の意図、その手法においても、しばしば興奮させるような歴史的価値のある史料に外ならない。彼(祖父)としても再版されても異存のないところであらう」と。(xiii 8~23)

ケーリーの述べる表現は、なお、理解のゆきとどかないところがあるが、次のように締めくくっている。

The significance of the indefinite

article at the beginning of the title was intentional. (xiii 23~24)

Otis Cary

July 18, 1975

Amherst House

Doshisha University

Kyoto

なお、この緒言には、さきにも触れたように、父フランク・ケーリーのことも及んでいるので、その歴史編纂にかかわる部分のみを抄記することとする。

私の父フランク・ケーリーは第三巻(第一巻 (Roman Catholic, Greek Orthodox) 第二巻 (Protestant Missions) を執筆し、現代に及ぶという Ambition (大望) を持っていた。それは子としての親への孝行 (filial piety) の単なる表明ではなかった。集められた定期刊行物やトラクト、レポート、それにケーリー家宛の書簡消息などが大型のバスケット (crate) にまとめられていた。しかし、第二次世界大戦後、父は宣教師現役生活の最後に、アメリカン・ボードの活動を建て直し、新しい組織としての日本基督教団との

関係において、土地建物を整理する事を自らの課題として優先することにしたことによって、その大望は実現に至らなかった。(xii 6~15)

私事にわたって恐縮であるが、フランク・ケーリーと最初に最後の機会、一九六八年五月、ケーリーさんの紹介をうけてアーモストでお会いしたときである。

かつて岡山でおこなわれた組合教会の総会(一九三七年・昭和十二年)において、軍に感謝する声明文の賛成の採決に起立することをこばみ、反対の態度を表明した方であることは、組合教会の記録の上で承知していた。したがって「この方だ」という思いをもって、ご挨拶をしたことは、いまも鮮明におぼえているけれども、第三巻編集の「大望」については、この「緒言」ではじめて、うかがうことである。

改めて、ケーリー家の父祖の「伝統」をうかがうことのできる、この「語部」の伝える伝承を、さらに伝えて頂くことをしきりに思う。

それは三代にわたる家の「業」の重さ

をしつかりと受けとめなければならぬ、という思いにたどりつくからである。

なお、参考のために、『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局）、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館）に掲載されているオーテス・ケーリー、フランク・ケーリー」にもとづいて、その年譜風の抄記を付記した。

オーテス・ケーリー略歴

- 一八五一・四・二〇 マサチューセッツ州に生まれる。
- 一八七二 アーモスト大学卒業、続いてアンドーヴアー神学校に入る。
- 一八七八(明治二一)エレンと結婚、三月来日、岡山伝道、J・C・ペリー、J・H・ペティと協力
- 一八九二(明治二五)同志社に移り神学校教授、教会史、説教、社会学担当。
- 一八九九(明治三二)Japan and its regeneration
- 一九〇四(明治三七)名誉神学博士(アーモスト大学)
- 一九〇九(明治四二)A History of Christianity in Japan
- 一九一九(大正八)同志社を退職帰国
- 一九二二(大正一一)オグデン(ユタ)、ロサンジュルス(カリフォルニア)伝道
- 一九三二・七・二三 マサチューセッツ州ブラッドフォード長男ジョージの家で死去。

フランク・ケーリー略歴

- 一八八八(明治二一)七・一八マサチューセッツ州に生まれる(三男)。
- 一九二一(明治四四)アーモスト大学卒業。
- YMCA教師として来日、大阪北野中学、天王寺中学教師。
- のち帰国してオベリン神学校に学ぶ。
- 一九二八(大正七)再来日、北海道小樽伝道、二〇年に及ぶ、のち、松山伝道に従う。
- 一九三七(昭和一二)岡山における日本組合基督教会総会で、軍に感謝する声明の賛成採決に起立せず。
- 一九四一(昭和一六)フィリピンに渡り、ダバオで日本人教会を応援。
- 一九四六(昭和二一)神戸女学院教授
- 頌栄短期大学学長
- 一九六〇(昭和三五)定年帰国。
- 一九七三・一一・一一 カリフォルニア州クレアモンドで死去。